戦後71年の日本――永続敗戦論

2016.3.18

白井　聡／京都精華大学人文学部専任講師

講師紹介

- 白井　聡（しらい・さとし）
- 1977年東京都生まれ
- 一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程修了

日本学術振興会特別研究員等を経て
京都精華大学人文学部専任講師

- 博士（社会学）
- 専門は政治学・社会思想

講師紹介（著作紹介①）

『未完のレーニン』
2007年、講談社

『「物質」の蜂起をめざして』
2010年、作品社

講師紹介（著作紹介）②

『永続敗戦論』2013年、
太田出版

『「戦後」の墓碑銘』
2015年、金曜日

『永続敗戦論――戦後日本の核心』（太田出版、2013）

「戦後という時代の実態が何だったか、これほど明確に解析した本はなかった。読んでいて慄然とするほど。」（池澤夏樹、作家）

『永続敗戦論』：二つの執筆動機①

- 鳩山由紀夫政権の退陣劇

普天間基地移設問題をめぐって、日米の意思が衝突した結果、日本側が敗北。

しかし、敗北を直視する代わりに、鳩山氏個人の資質に関するおしゃべりに終始。

8.15を「敗戦の日」ではなく、「終戦の日」として記憶していることと同じ。

『永続敗戦論』：二つの執筆動機②

- 福島第一原発の事故（3.11）

強烈な既視感

「戦争指導層の妄想的な自己過信と空想的な判断、裏づけのない希望的観測、無責任な不決断と混迷、その場しのぎの泥縄式の乱発……これらのすべてが、2011年の福島原発事故で克明に再現されている」（笠井潔『8.15と3.11』）

「無責任の体系」（丸山真男）の露呈

丸山真男「無責任の体系」の再臨

戦後、戦争指導者のうちの誰一人として、「私が戦争を始めた」とは言わなかった。
「むしろ自分は内心反対だったのだが」と全員が言う。ならば、誰に責任があるのか？
彼らによれば、誰にもない！
この「無責任の体系」によって、日本の間違った国家指導はより一層無惨なものとなった。

「無責任の体系」の本質

- 《実質》を閑却した《システムの自己維持》運動

《国体護持》のために無意味な戦闘を延々と継続

《原発推進体制維持》のために……

原発推進体制における「無責任の体系」

「この大綱を決めた原子力委員並びに策定会議委員一人ひとりに、この核燃料サイクル計画が本当にうまく行くと思っているのかと問えば、実は誰も高速増殖炉がちゃんと稼動するとは思っていないだろうし、六ヶ所村の再処理施設を稼動して生産されるプルトニウムは、プルサーマル程度では使い切ることはできないと思っているだろう。使用済み核廃棄物の処分方法について具体案を持っている人もいないのである。
しかし、責任者の顔が見えず、誰も責任を取らない日本型社会の中で、お互いの顔を見合わせながら、レミングのように破局に向かって全力で走りきる決意でも固めたように見える。つい60年ほど前、大義も勝ち目もない戦争に突き進んでいったように。私が『日本病』と呼ぶゆえんだ。」（佐藤栄佐久『知事抹殺』）

二つの出来事から見えてきた「戦後の核心」＝敗戦の否認

- 「敗戦の否認」に戦後レジームの全体重がかかっている。

- 「敗戦の否認」のロジック

日本が戦争に負けていないのだとすれば、大義も、勝利の可能性もなかった戦争を始めたことの責任を、誰も取る必要はないし、反省する必要もない。負けたことを認めていないので延々と負け続ける。すなわち、永続敗戦。

その目的：米国によって免責・登用された旧支配層を傀儡勢力として活用するため（属国化）。

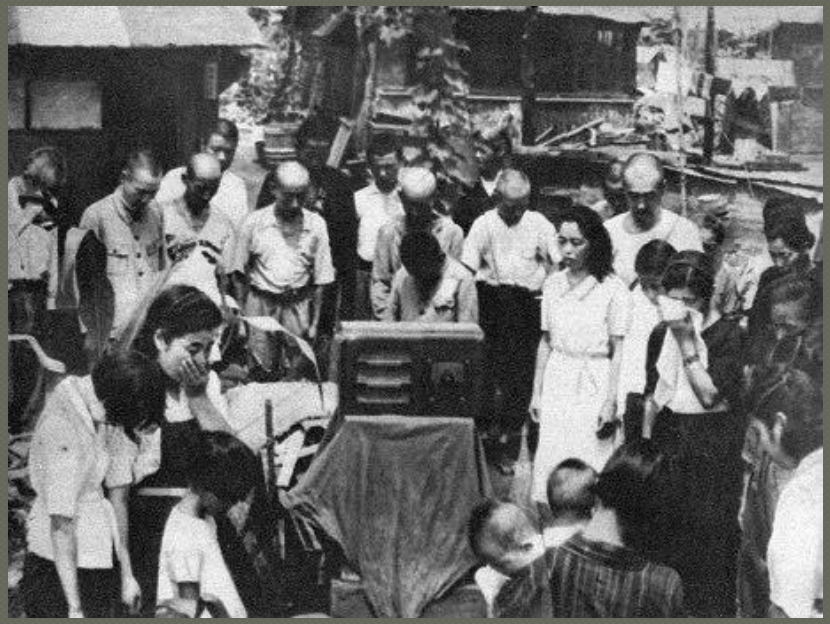
旧支配勢力（ファシズム勢力）の再登板によって日本を反共の砦とする、という日米合作のプロジェクト

岸信介（首相1957-60）

正力松太郎、読売新聞社主

1945.8.15
敗戦を曖昧化するプロジェクトの起動

「玉音放送」を聞く人々



降伏文書に調印する重光外相

高度成長から経済大国化による敗戦の帳消し

1945の東京

1986の東京

「敗戦の否認」を可能にした諸要素

一、本土決戦の回避と国体護持
「御聖断の本質」としての自己保身

二、寛大な賠償と速やかな経済復興
「日本には豊かになってもらう必要がある」（米）

三、議会制民主主義の外観
冷戦の最前線ではないゆえの特権

四、沖縄の要塞化
「暴力としてのアメリカ」を封印、不可視化

一～四の前提としての冷戦構造の成立、敗戦の否認の代償としての無制限対米従属

永続敗戦レジームの二面性
（対米従属とアジア諸国への高姿勢）

米上下両院合同会議で演説する安倍晋三首相（2015年4月29日）（AFPBB News）

米議会での演説…パールハーバー、バターンに言及する一方、広島・長崎には言及せず

機体の数字に注目…安部首相の無神経さはアジア諸国をいらだたせた(2013)

対米従属と東アジアでの孤立の循環構造

世界に類を見ない《特殊な》対米従属体制の形成

昭和天皇の「無私の精神」に感動するマッカーサー元帥

「私は米国を愛するがゆえに日米同盟の仕事を喜んでやってきた。多くの日本の友人がいるが、日本を愛するがゆえに私が何かをすることはない。何が米国の国益かを私は知っている」（リチャード・アーミテージ、2013年4月）

他国への従属を前提とする歪で卑小なナショナリズム

- 「親米保守」というスタンスのそもそもの異様さ、忠犬保守公、アメポチ。

「敗戦の否認」の観念性・空想性

- 本気で敗戦を否認するなら、サンフランシスコ講和条約を否定し、東京裁判を否定し、ポツダム宣言受諾を否定しなければならない。

⇒米・英・中・ロ・豪等と再び開戦し、今度は勝たなければならない。

- 永続敗戦レジームを可能にした条件の消滅

１．冷戦構造の消滅
２．日本のアジアでの国力の突出の相対化

おおよそ1990年前後に「戦後」は実質的に終わっていた。25年間に渡って柱のない家。

冷戦構造終結による日米関係の根本的変化とそれへの不適応

- アジアにおけるナンバーワン・パートナーとしての地位の相対化

- 庇護・互恵から収奪へ
「アメリカはますます衰退を深めるなかで、そのツケを全部日本に回してくるだろう。大変な時代になります」（堤清二＝辻井喬）
（Ex. TPP問題、対中国戦略）

⇒この変化に永続敗戦レジームは適応できない、エリート層の買弁化、国富の売り渡しによる自己保身

安倍政権は何をやっているのか？「戦後レジームからの脱却」の内実

- アベノミクス～新自由主義政策、原発推進路線への回帰
- 軍事への傾斜（積極的平和主義、ＮＳＣ設置、解釈改憲、特定秘密保護法、武器輸出禁止三原則の撤廃、新ガイドライン、新安保法制）＝対米従属の一層の強化、対中・対韓関係の悪化
- 歴史修正主義的言動（靖国参拝等）（＝敗戦の観念的否認）

⇒「脱却」ではなく、
永続敗戦レジームの純化による死守、「敗戦の否認」の徹底化（“ポツダム宣言なんて知ったこっちゃないよ！”）

「敗戦の否認」の徹底化とは？

- 対外的：歴史修正主義⇒半ば挫折

- 対内的：占領改革の否定
・憲法⇒無効化、封建主義的自主憲法
・教育⇒教育基本法改定、教科書への圧力
・労働者の権利⇒長年の権利不行使によって形骸化
・女性の参政権⇒「名誉男性」のみ尊重、他は人権侵害を許容

最大の否認：福島第一原発事故と2020年東京五輪

隷属による不満の代償としての戦後憲法への憎悪

- 戦後憲法への抽象的憎悪（反米感情の代補、隷属の否認）

「マック憲法守れるは マ元帥の下僕なり」（憲法改正の歌、中曽根康弘作詞）

⇒民主憲法を「押し付けられる」ほかなかった国の在り方を否認

- レイプ魔的レトリック

「みっともない憲法ですよ……積極的平和主義によって憲法9条の平和主義をよりよく実現できるのです！」（安倍晋三）

⇒新憲法草案によってまともな憲法を制定する能力がいまだにないという事実を自己暴露

知的劣化と幼児性

- 戦後レジームの基本構造への無理解

軍事的拡大を目指せば目指すほど、独立性を失い、従属が隷属化する、という基本構造を理解できない（アーミテージ・リポートを丸呑み）。

- 軍事力＝立派な国、という幼児性

「オイラも武器を持ちたいよう。もうコドモ扱いは嫌だよう。NATOにも入りたいよう…」
（斉藤美奈子「東京新聞」コラムより）

永続敗戦レジーム支配者たち（日米）のジレンマ

親米保守のジレンマ

- 対中脅威論を煽るほかない
- しかし、対中開戦などアメリカが許さない（在日米軍＝ビンの蓋論の復活）と知っている

ジャパン・ハンドラーのジレンマ

- 親米保守派を支援するしかない
- しかし、日中開戦など許容できない
- しかし、武器は売りたい

永続敗戦レジームの現在

・「積極的平和主義」＝戦争口実の積極的創出
⇒「改憲から戦争へ」ではなく「戦争から改憲へ」、永続敗戦レジームの維持手段としての戦争、資本主義の世界的行き詰まりを背景とした軍事ケインズ主義への傾斜

・矛盾は極点へ：新安保法制
⇒「アメリカとの約束」と「日本国憲法」どちらが大事なのか？　言わずもがな……「二重の法体系」（矢部宏治）。「極東バナナ共和国」としての戦後日本の本質の露呈

・山積する難問
⇒対テロ戦争、ＴＰＰ、アベノミクスの破綻、福島原発事故の被害……統治能力の不在の証明、「否認の政治」は臨界点へ

永続敗戦レジームの外部としての沖縄からの異議申し立て

「戦後レジームからの脱却」とよく言っておりますが、沖縄に関しては「戦後レジームの死守」をしていると、私はこう思っております。沖縄の基地問題無くして、日本を取り戻すことはできません。」

「日本の民主主義の品格が問われている」

翁長雄志沖縄県知事の発言

転換点における明白な対立構図の浮上

- 変革（＝永続敗戦レジームの打倒）の要求
- 排外主義者の要求＝永続敗戦レジームの死守

ご清聴、
ありがとうございました